

全生研京都大会「学校づくり」分科会基調提案

文責 塩崎義明(全生研常任委員)

1. 正義・正論を振りかざし、子どもたちに冷酷になった日本の教師たち

● “寛容” でなくなった日本の教師

子どもの失敗や間違いに対して、徹底的にダメ出しをし、罰して落ち込ませる。時には、排除するような通告もする。責任は家庭にあるとして保護者を呼び出し、家庭での「しつけ」の徹底をお願いする……。日本の教師が子どもたちの失敗に、こんなにも厳しく、冷酷になったのはいつからだろうか？

子どもだから、いけないとわかりつつ、やってしまうことだってあるはず。やけくそになったり、暴れたり、暴力を押しさえきれなくなる時だってある。その事情や背景について言及せず、その行為行動のみをとらえて否定するのはもはや指導とは言えない。

また、その原因のほとんどが、学校にある場合が多いのではないだろうか？つまり教師は、自分たちで子どもたちを荒れさせておいて自分たちで罰するといった「自作自演」をやっていることになる。

「厳しくしないと子どもになめられる」という声をよく聞く。しかし、本当に信頼されない教師とは、理不尽に子どもに厳しい教師ではないだろうか？寛容な教師がバカにされているだろうか？失敗受け止め、その原因を一緒に考え、次の見通しを与えてくれる教師が“なめられて”いるだろうか？

● 「正義・正論」を振りかざすことへの疑問

確かに、教師が語る「正義・正論」は正しいことが多いのだと思う。しかしそれを武器にして振りかざし、子どもたちに押し付けるのは賛成できない。

また、教師が語る「正義・正論」が子どもたちに伝わらないからといって、それを子どもたちのせいにするということについても疑問である。そんな時にこそ（子どもたちに否定された時にこそ）、その「正義・正論」が、子どもたちにとって本当に「正義・正論」であるのかの検討をするべきである。

実は、「正義・正論」は子どもたちの中で揉まれて検討され、生み出されるものはず……。そしてそれを導きだすのが指導であり、育てられていく力が自治の力だったはずである。

● 日本の教師は何におびえているのか

しかし私は、そんな日本の教師たちが（子どもたちに冷酷になったように見える教師たちが）、教室の前にそっと「教室はまちがうところだ」と貼っていることを知っている。そして、そんな掲示物を貼っていなくても、心の片隅で、子どもたちの失敗を許し、子どもたちと共

に生き、子どもたちに自治する力を育てたいと多くの教師は願っているのではないだろうか。

私たちは集団づくりの実践を通して、そんな教師の思いを引き出し、共に実践していく仲間として手を結んでいく必要がある。

2. 三つの“思い込み（思い込まれ）”の中で苦しんでいる教師たち

●気遣いと気働きとパワハラと

今、学校現場では三つの“思い込み（思い込まれ）”がある。

一つ目の思い込みは「成果や見栄え、そして指導方法については、足並みをそろえなければならない」という思い込みである。それがチームワークであり、そのために過剰な気遣いや気働きをするのが協同だと思っている。

また、気遣いや気働きは、他者に対してだけではなく“自分はまわりに合わせることで生きています”といったアピールするためにも発動しなければならない。そうでないと、「できない教師」「残念な人」といった烙印を陰で押される恐怖があるし、弱い立場の職員に対してパワハラ問題が広がってきていることも事実である。

最近また、職場の異常な多忙化が広がっているが、それは仕事量や提出物が増えたことだけでなく、この「気遣い・気働き」のための多忙化、といった面があることにも注意をほらいたい。

●足並みをそろえることと教師の個性を発揮することとは矛盾しない

精神的疾患は教師という職業に極端に多いのはご存知の通り。しかし、学校ごとに差があることも事実。つまり、そういったこととは無縁な学校もあるということ。

では、その差はどこから出てくるのか。

意外だと思うかもしれないが、教師個々が独自の指導方法で実践している学校（あまりにも子どもたちの指導が大変な学校でそうせざるを得ない学校も含む）……、それが許されている学校には精神的疾患で悩む教師が出る傾向が低い！というのが私の経験上の見立て。

逆に…、足並みをそろえる、共通理解をはかるといったことが前面に出され、なんでもかんでも見栄えよく実践することが求められる学校は、その足並みにそろえられない自分を責めてしまう教師が出てきてしまうということ。

足並みをそろえることと、教師の個性を発揮することとは矛盾しない。違う教育方法をとっていても、共通理解の元、足並みはそろはずである。

●指導の問題が責任問題に変わってしまうこと

二つ目の思い込みは、上からの理不尽な要求や指示に対しては、異議申し立てをせず我慢することが潔い（いさぎよい）、という思い込みである。

上からだけではない。担当の同僚からの提案についても、“大変な中準備してくれた提案

なんだから意見を言っでは失礼だ”といった雰囲気のある学校が多い。

意見交換のない集団の質が落ちていくのは当たり前である。また、同僚からの提案に意見しないということは、その取り組みを提案者だけの責任問題にしてしまうということであり、上からの指示に意見しないということは、それができない（しようとしな）自分に責任がふりかかるといった、責任問題になってしまうということでもある。

意見を言わない学校が、職員個々の悩みや苦悩についても無関心である傾向にあるのは、指導の問題が責任問題になってしまっていることと無関係ではない。

●共に悩むことが許される教師に

三つ目の思い込みが、教師は子どもたちや保護者の問いや要求に対して、きちんと答えや成果を出さなければならないという思い込みである。

しかし当然、「正論」（正しいという意味ではない）すぐに問題が解決できないケースがほとんどなわけで、そういった答えが出せない問題について、子どもや保護者のせいにしてしまうことも多い。たとえば、学校に来られない、いわゆる不登校の子ども・保護者に対して、何か悪いことをしているようにお説教をしている管理職や教師がいまだにいることもその一つの例。

教師は、子どもたちや保護者と一緒になって悩むべきである。そして、一緒になって悩むことが許される教師集団のあり方や可能性についてもっと検討されるべきである。

3. 子どもたちが平和的に生きることのできる学校の再生

●子どもの権利を守れる学校に

日本の教師が子どもたちの権利を守れなくなったのは、教育実践の自由が奪われたことと無関係ではない。学習指導要領にそって全国一斉に足並みをそろえることが強要され、教師個々の実践のアイデアや工夫をすることを自己規制しなければならなくなった学校現場。そして、そういった国の枠（方針）にはまらない子ども、その枠に沿うことに努力しない子どもは排除され、差別される学校現場。そこに子どもたちの権利はない……。

子どもたちは誰もが差別されず、意見表明・異議申し立てができ、学び、そして成長する権利をもっているはず。国や学校、そして教師の都合で子どもたちを扱ってはいけないはず。

学力向上だ！！などと言いながら、一部の子どもしかついていけない学習を進めることを強いているのが国や文科省。本当にすべての子どもの学力を向上させたいのであれば、地域や教室の子どもたちの実態からスタートする自由な実践を保障しなければならないのは当たり前。

また、個々の子どもと対話すること、雑談することは当然保障されなければならないし、その時間が保障されることは、教師にとっては実践の自由を勝ち取ることであり、子どもにとっては学ぶ権利の保障である。

雑務に追われ、子ども一人ひとりと話もできない学校現場は、子どもの権利が奪われている学校であるとも言わざるをえない。

●あらためて共同のあり方を問う

国による教育統制が進められていく中で、現場の教師は個々バラバラにされ、その不安と恐怖の中でおびえ、自分を守るために必死な状況である。

しかし私たちは、そんな状況であるからこそ、子どもたちの発達・成長の権利を守り、そして育てる学校づくりをすすめて行く必要があるのではないだろうか。この分科会では、現場の困難を乗り越え、子どもたちの権利を守り、自治の力を育てる実践を通して、どのようにして学校づくりの共同の可能性をどう見通していくのかを、参加者みんなで見つけ出していきたいと考えている。